

日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 八重樫 勝



手のひらに心を寄せて

岩手県高等学校長協会 会長 佐藤 有

(岩手県立盛岡第一高等学校校長)

初めて学級担任を受け持った頃のことです。問題行動を繰り返す生徒Aを自分の手のひらに重ねていろいろ想像してみました。Aは、手のひらではなく指先の方から私を見て何かを訴え、手助けを求めているようです。これを見て私はAがこの手の中にいるうちは、温かく聴き入れ、関わりを継続してこの手のひらに引き寄せようと思いました。

以来、私は手のひらを「生徒理解の器、指導の担当」と考えて生徒と接して来ました。手のひらは指導の範疇にある部分で、指一本一本は、言うなれば生徒の個性です。個性の強い生徒には反発して無下に離れようとしませんが、そんな時でも両手を広げ、指先を伸ばして手のひらに引き戻すように心掛けて来ました。

いろいろな生育歴をもつ生徒がいるように、教師も百人百様、そ

れぞれ異なる人生観や価値観、指導観をもって日常の指導に当たっております。さまざまな先生に教えられることは、生徒にとってはむしろ必要なことです。気の合う先生もいれば、気難しい？先生もいます。が、それはそれで仕方ないことでしょう。より大事なことは、私たち教師が教育のプロとして、使命感を持ち、自己研鑽を重ね、専門性を培いながら生徒の琴線に触れる確かな授業を行うことではないでしょうか。

ところで、本年はまったく予期もしなかったコロナ禍により、学校は休校を余儀なくされました。約一か月の間、校舎に生徒の出入りが途絶え、部活動に励む弾む声もなく、これまでの教員生活の中で経験したことのない火が消えたような寂しさを味わいました。

学校再開の始業式の日、久しぶりに登校した生徒は、三密状態を

心配するくらい、級友との再会に声を上げて喜び合っていました。この光景を目の当たりにして、学校は教師と生徒が同じ空間で、時間を共有し、相互に刺激を分かち合うかけがえのない成長の場であることを改めて実感しました。それと同時に、これを機会にこれからの時代における学校の在るべき姿はどうあればよいか衆智を集めて真剣に議論を重ねる必要があると思いました。

学校では、ソーシャルディスタンスなど「新しい生活様式」による教育活動が求められ、臨時休業等への備えとしてオンライン授業の導入が始まっています。しかし、この先、どんなに学びの形態が変わろうとも、教育は人づくり、その根底に、人と人とのかわわりを据え置く営みであることには変わりがないと思います。

新型コロナウイルスの収束までは未だかつて踏破したことのない難しい道ですが、子どもたちの未来のために、教育の本質を見失うことなく走り続けたいと気を引き締めております。

令和二年度支部定期総会 全議案を書面表決で承認

令和二年度日本教育会岩手県支部の定期総会は5月30日(土)午後1時から「サンセール盛岡」で開催する予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため緊急事態宣言が出され、所謂「3密」状態の会議等は自粛することが望ましいということ

で、今年度は「書面による表決」の形を取りました。総会に先だつての第一回理事会も同様に理事21名全員による「書面表決」としました。

理事会で承認された「第1号議案」から「第6号議案」までを記載した「総会要項」と「議決票」を48名の代議員に送付、全員から回答を頂きました。その結果「令和元年度事業報告・令和元年度支部会計収支決算報告・特別会計決算報告・令和二年度活動方針及び事業計画(案)・一般会計収支予算書(案)・令和二年度岩手県支部役員(案)」の六つの議案全てが賛成多数で承認されました。

支部総会が書面による表決の形になったのは今回が初めてで、九年前の東日本大震災発生時は、評議員会を総会の代わりとして

令和二年度(公社)日本教育会総会

五名の支部代議員が書面表決

全国教育大会北海道大会は中止に

6月6日(土)に東京お茶の水「ホテルジュラク」で開催予定の(公社)日本教育会の令和二年度総会は、全国各地から代議員が参加するため、新型コロナウイルスの感染拡大防止を考慮して、一般法人法や定款の条項に基づいて書面・電磁的方法により実施されました。岩手支部には各構成団体より選任された五名の代議員に本部から直接総会資料が郵送され、各自が「議決票」に記入し、本部に返送しました。その後、本部から全ての議案が承認されたとの報告がありました。また、今

実施しています。また、総会后2時半から予定されていた田野畑村在住の山地酪農家吉塚公雄氏の講演会も中止となりました。

◆前地区会長2氏に感謝状贈呈◆
永年にわたり地区会の会長として会の充実・発展にご尽力され、この度退任された目黒泰氏(前岩手地区会会長)と佐々木源良氏(前

年度は「第28回学校心理カウンセラー研修講座」が8月に札幌市で、「第45回全国教育大会北海道大会」が10月に函館市で開催される予定でしたが、どちらも北海道が新型コロナウイルスの感染の影響が極めて大きいことから、中止の決定がなされました。なお、「第10回教育実践顕彰事業」で会長賞を獲得した遠野市立土淵小学校への表彰伝達式も総会時に開催される予定でしたが、これも中止となり、表彰状は支部を経由して学校に届けられました。(関連記事6面に掲載)

下北地区会会長)のお二人に支部から感謝状と記念品を贈呈いたしました。本来であれば総会の場で贈呈する予定でしたが、今回は郵送させていただきます。

令和二年度 日本教育会岩手県支部役員

支部長 八重樫 勝
副支部長 三浦 壮六
高橋 忠孝

監事 高橋 ひさ子
中村 雅彦
三浦 晃

理事 今野 充雅
菊池 正樹
高橋 邦明
木村 幸治
菊池 敏宏
内川 千亜希
菊池 千賀子
平 芳則
狩原 雅裕
青笹 光一

理事・組織事業部長 小橋 敏
広報出版部長 川村 祥平
調査研究部長 玉川 英喜
事務局長 田山 英治
事務局次長 新沼 敏哉
書記 平澤 千麻子
若林 晶子

地区会長・事務局長 (事務局長)
盛岡 (会 長) 近藤 尚樹 本田 岳雄

新型コロナウイルス対応にみる学校・園の危機管理(その1) 花巻幼稚園の取り組みから

今年年明けからはじまった未知の新型コロナウイルスの感染

は日本の政治、経済、社会、教育、国民生活の在り方を大きく変えた。感染は全国に拡大、3月末には島根、鳥取、岩手を除く44道府県に広がり、4月10日には感染者ゼロがついに岩手のみとなった。こうした状況に、政府は2月末、全国の小・中・高等学校、特別支援学校に臨時休校を要請、4月には緊急事態宣言を発出した。

感染者ゼロの岩手においても生活は一変し、教育現場も様々な対応に追われた。この度、支部署務局では各校種・園のコロナ対応についての取材を企画、今回は第1回とし

て、花巻市立花巻幼稚園長今野充雅氏(岩手県国公立幼稚園協議会会長)にお聞きした。



インタビューに答える今野園長

「コロナで変わった日常」

同園では、園児が従来どおり「園生活を楽しみ、豊かな体験ができること」「遊びを通して友だちとかわり合えること」を大事にし、その中でどんな対策ができるかを考えてきた。まず、「体調管理・検温・健康管理カード」「手洗いの励行・手指の消毒」を園児の日常生活に組み入れるべくその習慣化を徹底した。園児は家での検温結果と体調を健康管理カードに記録し、毎朝登園時に先生に提出、健康観察チェックを受ける。在園中も園児の様子によって検温等を行い、体調に変化がみられる場合はためらわず保護者と連絡を取る。手洗いは園内に入る時や必要な場面で、ゆっくり行えるよう時間と場を確保し、歌にあわせたりしながら、楽しく行う。また、「3密」を避けるため、クラスを2つに分けたり、保護者参観はクラス毎に「参観ウィーク」を設定し、一日に参観者が集中することがないようにした。施設衛生面では、換気や消毒をまめに行う等々の取り組みを行っている。



登園したらず手指の消毒

「システムづくりと習慣化」

コロナ対応のポイントは「システムづくり」にあった。幼稚園職員は園児一人ひとりの生活、行動様式を事細かに実によく把握している。正にその道のプロ集団である。一日の活動のどの場面でも、どのような指導・支援を行えばよいか、システムをつくりあげていく過程では、一人ひとりが問題意識をもち、全職員がそれを共有し、きめ細かな対応を行っている。園児は新たな生活にも、案外直ぐに慣れていったようである。丁寧な指導を積み重ねれば、子どもの順応力は大きい。

今野氏のお話には、マイナス局面を転じて、幼児期の子どもにコロナを通して何をはぐくむかという思いが強く感じられた。コロナ禍により教育の本質も問われている感を深くした。

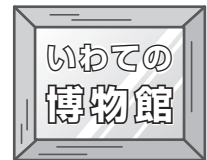
- 岩手 中田 直雅 菊池 千賀子
- 紫波 島山 秀一郎 和田 敦子
- 花巻 齊藤 義宏 八重 樗 浩
- 遠野 荒田 美知子 平 芳則
- 北上和賀 深澤 瞭 船田 浩
- 胆沢 堀籠 智志 石川 悦也
- 江刺 及川 欣一 菅原 俊博
- 一関西 狩原 雅裕 北村 正俊
- 一関東 佐藤 勝重 佐藤 紹榮
- 釜石 松高 正俊 岩角 聖孝
- 釜石 平田 裕彌 鈴木 崇
- 宮古 青笹 光一 大越 龍二
- 下北 村木 登 竹花 正太郎
- 九戸 外館 弘 小橋 敏
- 二戸 吉度 康男 土佐野 淳

公益社団法人日本教育会代議員

- 石橋 多賀子 駒込 武志
- 菊池 正樹 内川 千亜希
- 吉田 武雄

令和二年度 一般財団法人岩手県教育振興基金役員

- 理事長 八重 樗 勝
- 副理事長 佐藤 有
- 理事 佐藤 卓 石橋 多賀子
- 理事 内村 弘子 北田 伸
- 青木 裕信
- 常務理事 櫻 毅 新沼 敏哉
- 監事 千葉 紅子 佐々木 淳
- 評議員 浅野 宏理 中島 信義
- 木村 幸治 日野 澤明彦
- 八ツ 役真司 板橋 政志
- 佐藤 尚 菊池 敏宏



最新の縄文文化を世界へ 一戸町御所野遺跡

御所野縄文博物館 館長 高田 和徳

はじめに

最近縄文観が大きく変わってきた。土器や石器で語られてきた縄文時代が、低湿地からの木製品や編みカゴなど有機質の遺物の出土や関連科学の進歩によって自然環境が明らかになるとともに、多方面で縄文時代の姿が見えてきた。このような最新の縄文研究の情報を取り入れてムラを再現し、新たな情報から縄文文化を世界に発信しようとしている所がある。一戸



御所野縄文博物館の外観

土屋根の博物館

町の御所野縄文博物館である。

駐車場と博物館の間にあるつり橋を渡ると正面にあるのが博物館である。鉄筋コンクリートの二階建てで屋根には土がのっている。木や草が鬱蒼と生え、その間にはびこるフジ蔓がところどころで屋根からはみ出している。博物館の屋根に土をのせているのには訳がある。御所野遺跡で平成八年に縄文時代としては全国で初めて土屋根堅穴が発見されたからである。やがて土屋根堅穴は御所野遺跡の代名詞ともなり、史跡公園では大小の建物の大半が土屋根堅穴として復元されている。

博物館にはもうひとつのこだわりがある。クリ材である。縄文人がクリを食用としていたことは知られていたが、その材をふんだんに建物に使用していたことはあまり知られていない。

実はクリにはタンニンという成分が含まれるため腐食の進行を抑える作用があると考えられている。こんなエピソードがある。博物館の展示物のひとつとして、石斧による伐採実験で、径二五センチほどのクリ木を切ったことがある。

伐採した木は展示物とするため谷まで運んで水漬けにしたところ、二三日で水が真っ黒に変色したのである。木はその後時間をかけて日陰干しをしてから展示物としている。このように、ほかの木材と異なり、クリはタンニンを含んで長持ちすることを縄文人は既に知っていたようで、建物などでは徹底してクリを使っている。そういう近世民家でも地面に近い土台はかならずクリ材が使われていた。

このように縄文人とクリは密接にかかわっていることから博物館のコンクリートの打ちっぱなしの外壁にクリ材を使用している。博物館は、御所野遺跡のガイダンスと埋蔵文化財の調査研究を進



土屋根の博物館

めてその出土品を収蔵することを目的とした施設である。特に隣接している御所野遺跡について、目の前にある遺跡を実物の展示や映像を駆使して、頭で理解するだけでなく、五感で感じてもらうことを主眼とした展示を目指している。圧巻は第二展示室である。縄文ワールドと称して、円形ホールの壁面やスロープに森をイメージした造形物にプロジェクションマッピングで縄文時代の御所野遺跡の四季とともに縄文人の活動を映しだしている。内容はいずれも御所野遺跡の発掘調査の成果にもとずき、さらに最新の縄文研究の成果を取り入れている。

縄文むらの四季

——時は冬、こんこんと降り続く雪から吹雪へと画面が切り替わるとともに、待ちに待った雪解けのシーンとなり、やがて草木が芽吹くころになると縄文人が活発に動き出す。森では山菜取り、遠くで石斧で木を切る音が聞こえ、やがて大きな木が倒れる。

夏になるとホタルとともに、カラムシやアカソとともにシナノキの樹皮を水につけている様子が映る。前者は衣類など、後者は家づくりの縄などに使ったという想定での材料づくりである。シナノキから作る縄は丈夫で、北陸の縄文遺跡からも本物の縄が出土している。秋になると内陸の川沿いの縄文むらは急に忙しくなる。クリやトチノミ、あるいはクルミなどの木の実などが一斉に収穫時期を迎えたと思ったら、川には大量のサケが遡上してくる。映像は馬淵川の浅瀬につくった施設での捕獲の様子である。次々と乗り上げるサケを棒で叩いている。サケは貴重な保存食になるだけでなく、骨や皮も余すところがなく使い切るといふ。ムラ総出の作業だったのだろう。もしかすると



復元整備された御所野遺跡

北東北の縄文社会の豊かさはサケによって支えられていたのかも知れない。

狩りは晩秋からはじまる。御所野遺跡は、数多く出土する石器のうち特に石鏃（矢じり）の多い遺跡として知られている。それだけ狩猟が盛んだっただろう、焼かれたイノシシやシカの骨が多く出土している。

呪術の支配する社会

骨は焼かれて小片になったと思っていたら、それだけではなく、その後に細かく砕いた可能性のあ

ることを骨の専門家から聞いた。それほど小さな破片となって、主に遺跡中央の墓周辺からの土に混じった状態で出土する。おそらく儀礼をしながら、骨をばらまいているのかも知れない。

儀礼を行うのは動物だけではなく、縄文人にとつて大事なものがひとつの食糧であった木の実である。炭になった大量の木の実が焼かれたまま二箇所で見つかっている。いずれも形がきちんと残っているし、しかも二箇所ともトチノキが最も多く、それにクリとオニクルミが同じ割合で含まれている。何らかの意図があつて焼かれたことを示している。なかには焼

かれた木の実が、墓と考えられる配石遺構の外側にある六本柱の掘立柱建物の柱穴の柱を抜いた後の穴にまとめて入れられていた。柱を抜くということは、建物が常時あつたというより、役割を果たした後は解体されたことを示している。しかも解体した後に貴重な食糧である木の実を入れていることから、建物と木の実が何らかのつながりがあつたことになる。考えられることは、建物が墓の周辺にあることから、死者の葬送などに

関係すると考えたらどうだろうか。縄文人にとつて、自然は豊かであるとともに多くの災害をもたらすものでもあつた。このような自然と生きた縄文人はしだいに儀礼などによって自然との一体化を図り、呪術などに支配される社会になっていったのかも知れない。

象徴的なことは家を焼く風習である。御所野遺跡では、焼かれた家の跡がいくつも発見されている。詳細な調査により居住していた家を焼いたと考えられている。住んでいた家まで焼いてしまう儀礼とは何なのだろうか。

ところで焼失建物跡の調査では、建物に関する情報以外にも竪穴内に残る土などから肉眼で見えないものも含め多くの情報が得られる。御所野縄文博物館で紹介する内容のいくつかは、このような焼失住居跡の調査で得られたものである。

御所野遺跡など北東北と北海道の縄文遺跡群がそれぞれ関連のある十七遺跡で世界遺産を目指している。まもなくその結論が出る。

呪術性の強い縄文文化を世界に発信する機会もまもなくである。

令和元年度第10回教育実践顕彰事業
栗澤由紀教諭の論文が会長賞
 遠野市立土淵小学校の研究実践

令和元年度（公社）日本教育会主催の第10回教育実践顕彰事業に応募した遠野市立土淵小学校（佐々木哲也校長・児童77人）の栗澤由紀教諭の「課題解決に主体的に取り組む児童の育成」中学校区での連携を通して」というテーマの研究論文が、62編の応募数の中から、見事、最高賞である「会長賞（奨励金10万円）」を受賞しました。この賞は昨年度も盛岡市立上田中学校の佐藤進前校長が受



遠野市立土淵小学校校舎

賞しており、岩手県内の学校が2年連続で最高賞を獲得するという快挙となりました。なお、過去にも平成27年の第6回で山田町立大沢小学校が最高賞を獲得しており、これで3回目となります。また、今回、紫波町立紫波第一中学校と盛岡市立仁王小学校が応募した論文も「奨励賞」を受賞しています。最高賞の論文の表彰式は6月6日（土）に東京で開催される（公社）日本教育会の総会の場で行わ



左から 八重樫支部長、栗澤教諭、佐々木校長

れる予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため総会が書面表決の形を取ることとなり残念ながら中止となりました。代わって岩手県支部の八重樫支部長が、本部より送付された表彰状

を6月11日（木）に土淵小学校を訪問して直接伝達しました。賞状を受け取った栗澤由紀教諭は「会長賞を頂くとは夢にも思ってもいなくて驚きました。子どもたちの成長のために校長先生をはじめ先生方が皆で力を合わせ努力したことが名誉ある賞に繋がったものと思います。今回の受賞を励みにして今後も更に研究を深め、地域の特色を活かした実践を積み重ねたいと思います」と喜びを語っていました。なお、この論文の概要については、令和2年9月発行の第百八十五号で紹介する予定です。

論文審査会・審査委員長

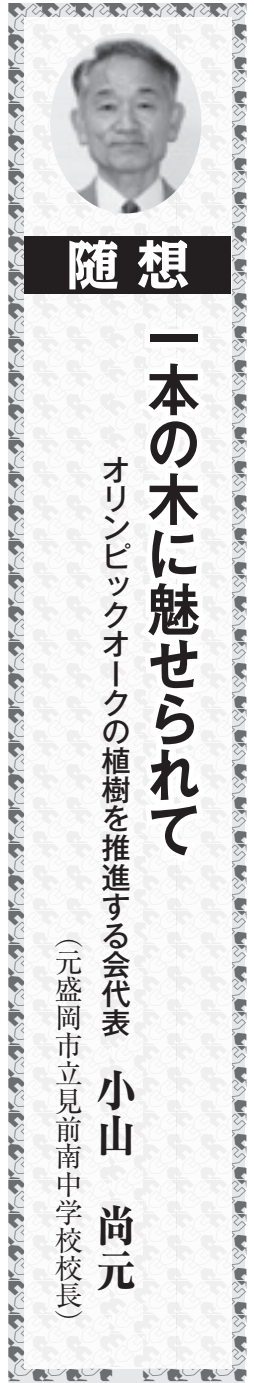
池田信明氏からのメッセージ

（公益社団法人日本教育会 理事長）

教育の今日的課題に積極的に取り組む研究実践の内容とともに、児童の学びの姿が丁寧に書かれていることや論文の主旨の明確さ、読みやすさが高く評価されて会長賞に決定しました。審査委員の意見

では「中学校区の九年間の指導を通して学習課題の解決のために小中学校が連携して授業実践に取り組んでいる。特に多様な学び合い、児童の実態分析を踏まえた学習指導と教材づくり、児童の主体的学びへの意識改革を促す工夫に積極的に取り組んでいる様子がよく分かる。新学習指導要領の示す方向を学校の実態に応じて実践している」等が出されました。また、「教

師による学び合いの実演」は児童の気持ちにより添いながら、先生方が協力して思いを伝える取り組みであり、教師の熱意が伝わるとともに、とても微笑ましいとの意見もありました。「理想の夢を追いつつ正しく強く伸びていく」児童を目指して、これからも素晴らしい学校づくりにご尽力されることを祈念申し上げます。



随想

一本の木に魅せられて

オリンピックオークの植樹を推進する会代表

小山 尚元

(元盛岡市立見前南中学校校長)

—金メダリストにドイツ柏—

1936年第16回ベルリン五輪で日本は6個の金メダルを獲得しました。有名な人に、あの女子水泳200m平泳ぎの前畑秀子選手がいます。陸上競技の金メダリストには、

マラソンの孫基禎、三段跳びの田島直人がいます。山口県出身で京都大学卒業の田島直人選手は、16,000mの世界新記録で優勝し、金メダルと共に、ドイツの神木と言われているドイツ柏の苗木を受けています。



太田勝浩校長先生は、児童一人ひとりと、そして教職員の笑顔と健康のために、いつも三つの配慮をしてくださ



岩手県小学校長会会長
理事 太田 勝浩氏
(盛岡市立中野小学校 校長)

います。一つ目は、毎朝、交差点で安全を見守りながら、挨拶や表情から児童の心の変化に気付き担任に知らせてくれる目配りです。二つ目は、様々な教育活動に対する称賛や指導へのねぎらいの言

葉、教職員を思いやる声掛けなど温かな気配りです。三つ目は、子ども・親・教職員とあらゆる目線で考え、正しい判断に基づく適切な助言をしてくださる心配りです。この、目配り・気配り・心配りという三つの配慮のある太田校長先生の全ての言動から「学校は安全・安心な場である」という強い信念を感じます。昼休みの終わりを告げる放送が今日も校庭に鳴り響きます。「一年生の皆さんは、走らず教室に戻りましょう。校長先生は、急いで職員室に戻りましょう」太田校長先生は、中野小学校を明るく照らす太陽です。(副校長 照井宗克)

これまで31回を数えるオリンピックでメダルの副賞に木の苗木を授与されたのは初めてでした。帰国の日本の金メダリスト達は船上で鉢に水をやりながら祖国に着いています

—ドイツ柏の二世誕生—

田島選手は、その苗木を出身の京都大学に植え、大きく成長し木に実がつくようになりました。

京大陸上部の会(蒼穹会)ではその実から苗木を作り、二世に「栄光の樹」と命名しました。

「栄光の樹」は最初に、田島選手がよく練習した東京の三井上高井戸グラウンドに1995年に植樹されました。

私は、当時盛岡市巻堀中学校に勤めていて、1996年の創立50周年に「勇氣と希望をもたらす木」として記念植樹しました。

—記念植樹の広がり—

1995年の植樹からこれまで全国約50ヶ所に、そのうち岩手

県内には21ヶ所に植樹されています。

岩手での主な植樹の箇所は、北京・ロンドンと2大会連続五輪選手を輩出した岩手町ホッケー場、2011年女子サッカーW・C優勝の岩清水選手出身の地元、滝沢市運動公園、2010年に中学女子200mで中学日本新を樹立した土橋選手出身校・盛岡市立見前中学校等々です。

2009年に盛岡工業陸上グラウンド脇に植樹した木には、生徒たちが木に挨拶をしてから練習していると聞き、木は笑顔で聳え立っているものと思います。

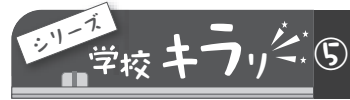
—東京2020新国立へ—
2020年東京五輪・パラリンピックが来年夏に開催されます。中心会場が木と緑にあふれる「杜のスタジアム」新国立競技場です。

全国の有志で「オリンピックオークの植樹を推進する会」を2016年に結成、新国立への植樹を申請、昨年許可を頂き、植樹実現の運びとなりました。

世界の人々に、80年以上前のドイツ柏の子孫(「栄光の樹」)の勇姿を見て頂く日が待たれます。

「テーマ読書」の楽しみ〜地域の図書館との連携を通して〜

一関市立川崎中学校 校長 及川 公子



一関市川崎町は、北上川、砂鉄川、千厩川に囲まれ、古より輸送、交通の要所として栄えました。その一方で、度々水害に見舞われて来た歴史があり、地域には高い防災意識が根付いています。

地域の教育に対する関心は高く、各方面からたくさんの方の協力、支援をいただきながら学校の教育活動を展開しております。

本校では、地域の川崎図書館と連携し、読書指導にも力を入れておりますが、ここでは、その取り組みの一つである「テーマ読書」について紹介します。

「テーマ読書」は、年三回行っており、全校生徒が同じテーマの本を読み、読んだ本を紹介するメッセージを書いて交流し、川崎市民センター(川崎図書館に隣接)に展示するというものです。

昨年度三回のテーマは、「いじ

め・命に向き合う」「あこがれの人をさがせ」「春は希望」はじまりの季節に読みたい本」でした。

テーマは学校で決めますが、その後、川崎図書館の協力で、テーマに合わせた選書を行っていただきます。川崎図書館だけで本が足りない場合は、一関市立図書館からも借りていただきます。



生徒の紹介文と本と一緒に展示

本校に勤務している読書普及員は、週の一日は川崎図書館の勤務となっており、学校と地域の図書館をつなぐ大きな役割を担っています。このようにして、生徒が十分に読めるだけの冊数と内容の本が集まります。

生徒は約一ヶ月をかけて、真剣に、かつ、楽しんで読書に取り組みます。特に、朝読書の時間帯は、物音一つしない静寂に包まれます。

この取り組みには、同じテーマの様々な本に触れられる良さや、友だちの様々なものの見方、考え方に触れられる良さがあります。

また、本を通して友だちや地域の皆さんとつながる楽しさがあります。生徒が紹介した本を、地域の方も手に取り、読んでくださり、メッセージが寄せられているのです。それは、本の感想のみならず、子どもたちへの温かい励ましもあり、本当に嬉しいものです。

読書は、言葉を覚えるだけでなく、感性をみがき、心を豊かにしてくれます。子どもたちには、中学校時代にたくさんのお話をしてほしいと願っています。

山寺の鐘

▼昨年5月末の支部定期総会後に開催した研修会の講演を当時一関図書館の副館長を勤められていた伊藤清彦氏にお願いした。伊藤氏は以前盛岡市内の書店に勤めていた時に、良書の発掘やPOP広告(購買時点広告)の活用など様々なアイデアを出して赤字続きだった経営を立て直し、「カリスマ店长」と称されていた方であった。その後、書店を退職し、新一関図書館に勤められ、そこでも個人貸出点数数岩手県一位になるなど多くの実績をあげられていた▼講演の内容は、現在の出版業界の様々な問題点を鋭く指摘されたり、学校図書館の活用の在り方を憂うお話もされた。その中で、唯一学校図書館の運営について絶賛されたのは、一関市立川崎中学校の図書館運営についてであった▼それは地域の図書館との連携の素晴らしさについてであった▼今月号の「学校キラリ⑤」はその川崎中学校に寄稿して頂いた。拝読頂いて今後の学校図書館経営の参考にして頂ければ幸甚である▼その伊藤氏が今年2月に65歳で急逝されたということが新聞で報道された時はまさかと我が目を疑った。講演を依頼しに一関図書館を訪ねた時に「自宅に今まで読んだ本が何万冊もあって家がつぶれそうです」と苦笑いをされながら、こやかにお話されていたことが今でも目に浮かぶ。合掌。(壮)